

在聖市人
物短評

在聖市邦人人物短評

八 ミ ル	釘 會 計	其 他 借 款
五 一 ミ ル	全 運 搬 費	三 〇 レ ース
一 八 〇 ミ ル	敷 地 チ ス ト ー	除 草 費 二 回
一 、一 一 〇 〇 ミ ル	學 校 建 築	其 他 借 款
二 八 〇 ミ ル	便 利 費	
支 出 總 計		
五 コ ン ト 一 四 八 ミ ル	七 〇 〇 レ ー	
差 別 殘 金	二 五 一 ミ ル	
小 林 新 太 郎	三 一 〇 〇 レ ー	
花 石 藤 人		
栗 原 金 次 郎		
大 石 智 覺		
Paulo Monteiro		
Condido Monteiro		
右六氏は特に學校創立に對 て獻身的に奔走努力致し被下 此處に改めて厚く御禱申上候 サンタオリンピア組合		
學務員及會計 高瀬豊記		



[同不順] 換交刺名

上 松 正 助 <small>ね</small>	仲買商 平田 <small>いその</small> 滿	矢野 熊太郎	岡島 仁郎	烟中 仙次郎	丸山 丈夫	山田 登幸	塩見 貞太郎	荒毛 勝市	九林 久次郎	上野 米藏	松本 高信	百田 若松	黒岩 秀吉	須山 勘一	阿久津 龍一郎	柳澤 富雄	岡田 英定	目黑 靜	園田 三吉	花野 雲平	佐藤 靜	河村 保喜	上坂 周平
	烟野 宗太郎 <small>いし</small>	本田 清子 授	高橋 善七	沖山 心平 <small>たま子</small>	渡嘉敷 唯正 <small>かま子</small>	平田 はな 伊平	手島 和三郎 <small>ぎん</small>	佐野 信代	狩野 とみか 五作	横田 すな子 周一	高田 しげの 市次郎	薬師 文子	木村 孝太郎 <small>さかね</small>	片岡 千賀惠 音市	河原 わかな 政右衛門	加納 千賀惠 一意	名越 とみ 正夫	權藤 ロザリーナ 密次	大谷 峯松	齊藤 甚七 <small>ちよの</small>	淵清 とき <small>二</small>	水谷 つや 熊次	鈴木 林九郎 <small>すね</small>
古庄 みつ喜 <small>き</small>	吉田 わき藏	山口 さつ助	松藤 さだめ	代田 さだめ	佐藤 常喜	中島 か安 も喜	本田 籐	副島 ちさよ 一男	澤尾 江七	古賀 政子	大原 ちゑ 政次	矢部 政三	中川 花子	原 その 美彌 彦	横山 敏子	山中 まる一	笹田 松衛數	柴山 はまよ 勘次郎	城間 はな 嘉助	原 はな 實藏	庄山 みすの 才吉	福島 文捨 吉子	羽高 ちよ 權藏
	藤田 おしを 清	平田 やねの 源藏	安元 まさの 青太	重富 しま六	出利 すな 葉羊	大石 すな 季造	鈴木 かじゆ 智覺	松原 かじゆ 市郎	平田 うめ 精吾	坂本 たつの 律造	鎌田 つるの 信一郎	杉本 みか 法雄	續 はづ 雪太郎	田甫 ひさ 松二郎	佐々木 ひさ 廊吉	藤澤 真子	安瀬 マリア 信盛	村上 繁人	平田 はつよ 地價藏	青木 はつよ 多喜藏	中須 美子	吉井 かの 彦助	山内 すなね 龟喜
佐納 きみ 政治	廣木 こしづ 義人	淺野 こよ 利枝	玉城 よし 從義	渡邊 いし 友子	高野 いし 和家子	齊藤 よしの 等	芳我 よしの 仁吉	高田 しげの 安次郎	竹原 さとの 利一	柴尾 つきの 新市	石川 さきの 増太郎	人形 なをね 源彌	森定 せきの 伴治郎	堀本 まつよ 増雄	福原 みさ子 信義	加藤 さるた 照子	西 金藏	下谷 こと 治三郎	保科 より子 松五郎	樺葉 いその 彦平	出利 かめよ 葉大三	緒方 かめよ 喜久馬	中熊 さが喜
	瀧本 たまよ 時之進	建本 さを 健介	鈴木 昌吉	橋浦 つや 昌雄	杉野 わや 司	綾部 さや 伍	師富 さや 榮	山本 たま 森喜	木町 たま 文代	原 まさの 惣太郎	母倉 みね 音次郎	美甘 あさの 元次郎	下田 みよ 力藏	藤永 ふて 良藏	山治 いす 良藏	山室 いと 樺太郎	藤原 もみ 嘉太郎	松岡 こよ 勘三郎	植田 みさ 健太郎	今村 かよ 惟喜	波止 きく 豊吉	鐘江 かめよ 藤太郎	秋永 しか 熊吉
「次頁にづく」	東島 ゆき 初一	東島 ゆき 初一	宮崎 はつ子	岡本 つね 忠吉	岡本 君子	間崎 さくの 三三一	後藤 さくの 七郎	服部 いく 新次	森勘 さくの 右衛門	河野 さくの 益躬	木村 さくの 要作	和田 ますの 周一郎	東條 さくの 善藏	農田 なは 源行	今村 はな 權造	木村 ねは 根末松	佐々木 ねは 光太郎	山本 さゆみ 只一	坂本 たみ 留次郎	井上 たみ 伸一	錦織 りき 傳吉	重本 さき 松次郎	



小篇

瞳

果南山人

(一)

暮合ひから疊つて居た空は、夜學を終へて門を出る頃は絹糸のやうな雨が、街燈にぼんやりけぶつて居た。デヤルデンから右に折れて行く俺……それが如何に無駄な、さうして人が聞いたら屹度、馬鹿な奴だ……と笑はれる事を、判り過ぎる程知つて居ながら、自づと向いて行く足を何うする事も出来なかつた。

「あ……やつぱり今夜も會へり鐵の電柱にもたれたりして、通りしては物思ひに疲れた跡を冷や、牲を追廻して居る五六匹の犬の群れ位いであつた。

街とは言つても此の邊りは金持連の集落らしく、通の兩側は部厚の堀に仕切られて、數奇を凝らした家々が、街燈に照し出されてひつそりしてゐる。そしてその静寂の中から響いて來る微妙なビヤノのリズムは、何時もの如く俺を泣かすのであつた「あの女ではないのか知ら?」

俺は、ふとこんな事を考へ出した。魅惑的な美しい瞳、水色の短い袖から無造作に出てゐるもの如く俺を泣かすのであつた「あの女ではないのか知ら?」

メイヤに覆はれた足の曲線美……そうした軀體に宿る魂こそ、神の様なものではあるまい張り切つた胸、他の部分より稍々發達して居る腰のあたり、素脚ではないかと思はれる肉色の

一月も前、とある日曜の夜、例によつて(俺はバウル・獨持の事であると思ふ)街の青年男女は公園のコンクリート疊の上を、男等は内側を左に、女等は

暮合ひから疊つて居た空は、外側を右へ音樂につれて、互に見遣りながら廻るのであつた。蒸し返すやうな脂粉の香、腋臭と香水、幾色かの美貌の顔、極端に變つた衣裳の色彩、等が臭氣を着た方が、俺の方に向いた。

土橋の手摺にもたれて語り合つて居る女等の前を通る時、水色を着た方が、俺の方に向いた。

「あ!! ……何と美しい瞳だ」俺は危く斯ふ喰る処だつた。其夜俺は彼女の後をつけて丁度此のルアで見失なつたのであつた。

美しい瞳……それを求めて……俺は其の後學校歸りに毎夜此の邊をうろついた。

この俺は何うかしてゐる……と、思ひながら……殊に日曜の夜はデヤルデンの内を、足を棒にして探し求めた

彼れは一時間も待つたが、通りには深く幌を下した自動車も出来なかつた。

街とは言つても此の邊りは金持連の集落らしく、通の兩側は部厚の堀に仕切られて、數奇を凝らした家々が、街燈に照し出されてひつそりしてゐる。そしてその静寂の中から響いて來る微妙なビヤノのリズムは、何時もの如く俺を泣かすのであつた「あの女ではないのか知ら?」

俺は、ふとこんな事を考へ出した。魅惑的な美しい瞳、水色の短い袖から無造作に出てゐるもの如く俺を泣かすのであつた「あの女ではないのか知ら?」

メイヤに覆はれた足の曲線美……そうした軀體に宿る魂こそ、神の様のものではあるまい張り切つた胸、他の部分より稍々發達して居る腰のあたり、素

脚ではないかと思はれる肉色の

一月も前、とある日曜の夜、例によつて(俺はバウル・獨持の事であると思ふ)街の青年男女は公園のコンクリート疊の上を、男等は内側を左に、女等は

中で、反省して見るのであつたが、結局彼女の美しい瞳は、心に知ると妻叱可られるから沈黙してようだい、其のかわりに、一度性交を味はつた彼女はけぶつて居た。

デヤルデンから右に折れて行く足を何うする事も出来なかつた。

「あ……やつぱり今夜も會へ

り鐵の電柱にもたれたりして、通りしては物思ひに疲れた跡を冷

や、牲を追廻して居る五六匹の

犬の群れ位いであつた。

街とは言つても此の邊りは金持連の集落らしく、通の兩側は部厚の堀に仕切られて、數奇を凝らした家々が、街燈に照し出されてひつそりしてゐる。そしてその静寂の中から響いて來る微妙なビヤノのリズムは、何時もの如く俺を泣かすのであつた「あの女ではないのか知ら?」

俺は、ふとこんな事を考へ出した。

メイヤに覆はれた足の曲線美……そうした軀體に宿る魂こそ、神の様のものではあるまい張り切つた胸、他の部分より稍々發達して居る腰のあたり、素

脚ではないかと思はれる肉色の

一月も前、とある日曜の夜、例によつて(俺はバウル・獨持の事であると思ふ)街の青年男女は公園のコンクリート疊の上を、男等は内側を左に、女等は

暮合ひから疊つて居た空は、夜學を終へて門を出る頃は絹糸のやうな雨が、街燈にぼんやりけぶつて居た。デヤルデンから右に折れて行く俺……それが如何に無駄な、さうして人が聞いたら屹度、馬鹿な奴だ……と笑はれる事を、判り過ぎる程知つて居ながら、自づと向いて行く足を何うする事も出来なかつた。

「あ……やつぱり今夜も會へ

り鐵の電柱にもたれたりして、通りしては物思ひに疲れた跡を冷

や、牲を追廻して居る五六匹の

犬の群れ位いであつた。

街とは言つても此の邊りは金持連の集落らしく、通の兩側は部厚の堀に仕切られて、數奇を凝らした家々が、街燈に照し出されてひつそりしてゐる。そしてその静寂の中から響いて來る微妙なビヤノのリズムは、何時もの如く俺を泣かすのであつた「あの女ではないのか知ら?」

俺は、ふとこんな事を考へ出した。

メイヤに覆はれた足の曲線美……そうした軀體に宿る魂こそ、神の様のものではあるまい張り切つた胸、他の部分より稍々發達して居る腰のあたり、素

脚ではないかと思はれる肉色の

一月も前、とある日曜の夜、例によつて(俺はバウル・獨持の事であると思ふ)街の青年男女は公園のコンクリート疊の上を、男等は内側を左に、女等は

暮合ひから疊つて居た空は、夜學を終へて門を出る頃は絹糸のやうな雨が、街燈にぼんやりけぶつて居た。デヤルデンから右に折れて行く俺……それが如何に無駄な、さうして人が聞いたら屹度、馬

鹿な奴だ……と笑はれる事を、判り過ぎる程知つて居ながら、自づと向いて行く足を何うする事も出来なかつた。

「あ……やつぱり今夜も會へ

り鐵の電柱にもたれたりして、通りしては物思ひに疲れた跡を冷

や、牲を追廻して居る五六匹の

犬の群れ位いであつた。

街とは言つても此の邊りは金持連の集落らしく、通の兩側は部厚の堀に仕切られて、數奇を凝らした家々が、街燈に照し出されてひつそりしてゐる。そしてその静寂の中から響いて來る微妙なビヤノのリズムは、何時もの如く俺を泣かすのであつた「あの女ではないのか知ら?」

俺は、ふとこんな事を考へ出した。

メイヤに覆はれた足の曲線美……そうした軀體に宿る魂こそ、神の様のものではあるまい張り切つた胸、他の部分より稍々發達して居る腰のあたり、素

脚ではないかと思はれる肉色の

一月も前、とある日曜の夜、例によつて(俺はバウル・獨持の事であると思ふ)街の青年男女は公園のコンクリート疊の上を、男等は内側を左に、女等は

暮合ひから疊つて居た空は、夜學を終へて門を出る頃は絹糸のやうな雨が、街燈にぼんやりけぶつて居た。デヤルデンから右に折れて行く俺……それが如何に無駄な、さうして人が聞いたら屹度、馬

鹿な奴だ……と笑はれる事を、判り過ぎる程知つて居ながら、自づと向いて行く足を何うする事も出来なかつた。

「あ……やつぱり今夜も會へ

り鐵の電柱にもたれたりして、通りしては物思ひに疲れた跡を冷

や、牲を追廻して居る五六匹の

犬の群れ位いであつた。

街とは言つても此の邊りは金持連の集落らしく、通の兩側は部厚の堀に仕切られて、數奇を凝らした家々が、街燈に照し出されてひつそりしてゐる。そしてその静寂の中から響いて來る微妙なビヤノのリズムは、何時もの如く俺を泣かすのであつた「あの女ではないのか知ら?」

俺は、ふとこんな事を考へ出した。

メイヤに覆はれた足の曲線美……そうした軀體に宿る魂こそ、神の様のものではあるまい張り切つた胸、他の部分より稍々發達して居る腰のあたり、素

脚ではないかと思はれる肉色の

一月も前、とある日曜の夜、例によつて(俺はバウル・獨持の事であると思ふ)街の青年男女は公園のコンクリート疊の上を、男等は内側を左に、女等は

暮合ひから疊つて居た空は、夜學を終へて門を出る頃は絹糸のやうな雨が、街燈にぼんやりけぶつて居た。デヤルデンから右に折れて行く俺……それが如何に無駄な、さうして人が聞いたら屹度、馬

鹿な奴だ……と笑はれる事を、判り過ぎる程知つて居ながら、自づと向いて行く足を何うする事も出来なかつた。

「あ……やつぱり今夜も會へ

り鐵の電柱にもたれたりして、通りしては物思ひに疲れた跡を冷

や、牲を追廻して居る五六匹の

犬の群れ位いであつた。

街とは言つても此の邊りは金持連の集落らしく、通の兩側は部厚の堀に仕切られて、數奇を凝らした家々が、街燈に照し出されてひつそりしてゐる。そしてその静寂の中から響いて來る微妙なビヤノのリズムは、何時もの如く俺を泣かすのであつた「あの女ではないのか知ら?」

俺は、ふとこんな事を考へ出した。

メイヤに覆はれた足の曲線美……そうした軀體に宿る魂こそ、神の様のものではあるまい張り切つた胸、他の部分より稍々發達して居る腰のあたり、素

脚ではないかと思はれる肉色の

一月も前、とある日曜の夜、例によつて(俺はバウル・獨持の事であると思ふ)街の青年男女は公園のコンクリート疊の上を、男等は内側を左に、女等は

暮合ひから疊つて居た空は、夜學を終へて門を出る頃は絹糸のやうな雨が、街燈にぼんやりけぶつて居た。デヤルデンから右に折れて行く俺……それが如何に無駄な、さうして人が聞いたら屹度、馬

鹿な奴だ……と笑はれる事を、判り過ぎる程知つて居ながら、自づと向いて行く足を何うする事も出来なかつた。

「あ……やつぱり今夜も會へ

り鐵の電柱にもたれたりして、通りしては物思ひに疲れた跡を冷

や、牲を追廻して居る五六匹の

犬の群れ位いであつた。

街とは言つても此の邊りは金持連の集落らしく、通の兩側は部厚の堀に仕切られて、數奇を凝らした家々が、街燈に照し出されてひつそりしてゐる。そしてその静寂の中から響いて來る微妙なビヤノのリズムは、何時もの如く俺を泣かすのであつた「あの女ではないのか知ら?」

俺は、ふとこんな事を考へ出した。

メイヤに覆はれた足の曲線美……そうした軀體に宿る魂こそ、神の様のものではあるまい張り切つた胸、他の部分より稍々發達して居る腰のあたり、素

脚ではないかと思はれる肉色の

一月も前、とある日曜の夜、例によつて(俺はバウル・獨持の事であると思ふ)街の青年男女は公園のコンクリート疊の上を、男等は内側を左に、女等は

暮合ひから疊つて居た空は、夜學を終へて門を出る頃は絹糸のやうな雨が、街燈にぼんやりけぶつて居た。デヤルデンから右に折れて行く俺……それが如何に無駄な、さうして人が聞いたら屹度、馬

鹿な奴だ……と笑はれる事を、判り過ぎる程知つて居ながら、自づと向いて行く足を何うする事も出来なかつた。

「あ……やつぱり今夜も會へ

り鐵の電柱にもたれたりして、通りしては物思ひに疲れた跡を冷

や、牲を追廻して居る五六匹の

犬の群れ位いであつた。

街とは言つても此の邊りは金持連の集落らしく、通の兩側は部厚の堀に仕切られて、數奇を凝らした家々が、街燈に照し出されてひつそりしてゐる。そしてその静寂の中から響いて來る微妙なビヤノのリズムは、何時もの如く俺を泣かすのであつた「あの女ではないのか知ら?」

俺は、ふとこんな事を考へ出した。

メイヤに覆はれた足の曲線美……そうした軀體に宿る魂こそ、神の様のものではあるまい張り切つた胸、他の部分より稍々發達して居る腰のあたり、素

脚ではないかと思はれる肉色の

一月も前、とある日曜の夜、例によつて(俺はバウル・獨持の事であると思ふ)街の青年男女は公園のコンクリート疊の上を、男等は内側を左に、女等は

暮合ひから疊つて居た空は、夜學を終へて門を出る頃は絹糸のやうな雨が、街燈にぼんやりけぶつて居た。デヤルデンから右に折れて行く俺……それが如何に無駄な、さうして人が聞いたら屹度、馬

鹿な奴だ……と笑はれる事を、判り過ぎる程知つて居ながら、自づと向いて行く足を何うする事も出来なかつた。

「あ……やつぱり今夜も會へ

り鐵の電柱にもたれたりして、通りしては物思ひに疲れた跡を冷

や、牲を追廻して居る五六匹の

犬の群れ位いであつた。

街とは言つても此の邊りは金持連の集落らしく、通の兩側は部厚の堀に仕切られて、數奇を凝らした家々が、街燈に照し出されてひつそりしてゐる。そしてその静寂の中から響いて來る微妙なビヤノのリズムは、何時もの如く俺を泣かすのであつた「あの女ではないのか知ら?」

</div

漫

四
筆

主な誤報は、日本に對しても、又日本に對しても、國の使が、相手が無事災で事件が何事も起らぬと云つて無爲に月給を支給する。日本に對しても、又日本に對しても、國の使が、相手が無事災で事件が何事も起らぬと云つて無爲に月給を支給する。日本に對しても、又日本に對しても、國の使が、相手が無事災で事件が何事も起らぬと云つて無爲に月給を支給する。

アマゾン河岸の新店 Casa Moreira

大坂商船會社

